

【D年】受難節第2主日(2024年2月25日)

【旧約聖書日課】列王記下 6章8~17節

8アラムの王がイスラエルと戦っていたときのことである。王は家臣を集めて協議し、「これこれのところに陣を張ろう」と言った。9しかし、神の人はイスラエルの王のもとに人を遣わし、「その場所を通らないように注意せよ。アラム軍がそこに下って来ている。」と言わせた。10イスラエルの王は神の人が知らせたところに人を送った。エリシャが警告したので、王はそこを警戒するようになった。これは一度や二度のことではなかった。11アラムの王の心はこの事によって荒れ狂い、家臣たちを呼んで、「我々の中のだれがイスラエルの王と通じているのか、わたしに告げなさい」と言った。12家臣の一人が答えた。「だれも通じていません。わが主君、王よ、イスラエルには預言者エリシャがいて、あなたが寝室で話す言葉までイスラエルの王に知らせているのです。」13アラムの王は言った。「行って、彼がどこにいるのか、見て来るのだ。わたしは彼を捕らえに人を送る。」こうして王に、「彼はドタンにいる」という知らせがもたらされた。14王は、軍馬、戦車、それに大軍をそこに差し向けた。彼らは夜中に到着し、その野を包囲した。15神の人の召し使いが朝早く起きて外に出てみると、軍馬や戦車を持った軍隊が町を包囲していた。従者は言った。「ああ、御主人よ、どうすればいいのですか。」16するとエリシャは、「恐れはならない。わたしたちと共にいる者の方が、彼らと共にいる者より多い」と言って、17主に祈り、「主よ、彼の目を開いて見えるようにしてください」と願った。主が従者の目を開かれたので、彼は火の馬と戦車がエリシャを囲んで山に満ちているのを見た。

【使徒書日課】エフェソの信徒への手紙 5章6~14節

6むなしい言葉に惑わされてはなりません。これらの行いのゆえに、神の怒りは不従順な者たちに下るのです。7だから、彼らの仲間に入れられないようにしなさい。8あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています。光の子として歩みなさい。9—光から、あらゆる善意と正義と真実が生じます。—10何が主に喜ばれるかを吟味しなさい。11実を結ばない暗闇の業に加わらないで、むしろ、それを明るみに出さなさい。12彼らがひそかに行っているのは、口にするのも恥ずかしいことなのです。13しかし、すべてのものは光にさらされて、明らかにされます。14明らかにされるものはみな、光となるのです。それで、こう言われています。「眠りにについている者、起きよ。死者の中から立ち上がれ。そうすれば、キリストはあなたを照らされる。」

【福音書日課】ヨハネによる福音書 9章1~41節

1さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。2弟子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」3イエスはお答えになった。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。4わたしたちは、わたしをお遣わしになった方の業を、まだ目のあるうちにに行わねばならない。だれも働くことのできない夜が来る。5わたしは、世にいる間、世の光である。」6こう言うてから、イエスは地面に唾をし、唾で土をこねてその人の目にお塗りになった。7そして、「シロアム—『遣わされた者』という意味—の池に行って洗いなさい」と言われた。そこで、彼は行って洗い、目が見えるようになって、帰って来た。8近所の人々や、彼が物乞いであったのを前に見ていた人々が、「これは、座って物乞いをしていた人ではないか」と言った。9「その人だ」と言う者もいれば、「いや違う。似ているだけだ」と言う者もいた。本人は、「わたしがそうなのです」と言った。10そこで人々が、「では、お前の目はどのようにして開いたのか」と言うと、11彼は答えた。「イエスという方が、土をこねてわたしの目に塗り、『シロアムに行って洗いなさい』と言われました。そこで、行って

洗ったら、見えるようになったのです。」12人々が「その人はどこにいるのか」と言うと、彼は「知りません」と言った。13人々は、前に盲人であった人をファリサイ派の人々のところへ連れて行った。14イエスが土をこねてその目を開けられたのは、安息日のことであった。15そこで、ファリサイ派の人々も、どうして見えるようになったのかと尋ねた。彼は言った。「あの方が、わたしの目にこねた土を塗りました。そして、わたしが洗うと、見えるようになったのです。」16ファリサイ派の人々の中には、「その人は、安息日を守らないから、神のもとから来た者ではない」と言う者もいれば、「どうして罪のある人間が、こんなしるしを行うことができるだろうか」と言う者もいた。こうして、彼らの間で意見が分かれた。17そこで、人々は盲人であった人に再び言った。「目を開けてくれたということだが、いったい、お前はあの人をどう思うのか。」彼は「あの方は預言者です」と言った。

18それでも、ユダヤ人たちはこの人について、盲人であったのに目が見えるようになったということ信じなかった。ついに、目が見えるようになった人の両親を呼び出して、19尋ねた。「この者はあなたたちの息子で、生まれつき目が見えなかったと言うのか。それが、どうして今は目が見えるのか。」20両親は答えて言った。「これがわたしどもの息子で、生まれつき目が見えなかったことは知っています。21しかし、どうして今、目が見えるようになったかは分かりません。だれが目を開けてくれたのかも、わたしどもは分かりません。本人にお聞きください。もう大人ですから、自分のことは自分で話してください。」22両親がこう言ったのは、ユダヤ人たちは恐れていたからである。ユダヤ人たちは既に、イエスをメシアであると公に言い表す者がいれば、会堂から追放すると決めていたのである。23両親が、「もう大人ですから、本人にお聞きください」と言ったのは、そのためである。

24さて、ユダヤ人たちは、盲人であった人をもう一度呼び出して言った。「神の前で正直に答えなさい。わたしたちは、あの者が罪ある人間だと知っているのだ。」25彼は答えた。「あの方が罪人かどうか、わたしには分かりません。ただ一つ知っているのは、目の見えなかったわたしが、今は見えるということです。」26すると、彼らは言った。「あの者はお前にどんなことをしたのか。お前の目をどうやって開けたのか。」27彼は答えた。「もうお話ししたのに、聞いてくださいませんかでした。なぜまた、聞くことなされるのですか。あなたがたもあの方の弟子になりたいのですか。」28そこで、彼らはののしって言った。「お前はあの方の弟子だが、我々はモーセの弟子だ。」29我々は、神がモーセに語られたことは知っているが、あの者がどこから来たのかは知らない。」30彼は答えて言った。「あの方がどこから来られたか、あなたがたがご存じないとはい、実に不思議です。あの方は、わたしの目を開けてくださったのに。31神は罪人の言うことはお聞きにならないと、わたしたちは承知しています。しかし、神をあがめ、その御心を行う人の言うことは、お聞きになります。32生まれつき目が見えなかった者の目を開けた人がいるということなど、これまで一度も聞いたことがありません。33あの方が神のもとから来られたのであれば、何もおできにならなかったはずです。」34彼らは、「お前は全く罪の中に生まれたのに、我々に教えようというのか」と言い返し、彼を外に追い出した。

35イエスは彼が外に追い出されたことをお聞きになった。そして彼に出会って、「あなたはその子を見るか」と言われた。36彼は答えて言った。「主よ、その方はどんな人ですか。その方を信じたいたのですが。」37イエスは言われた。「あなたは、もうその人を見ている。あなたと話しているのが、その人だ。」38彼が、「主よ、信じます」と言って、ひざまずくと、39イエスは言われた。「わたしはこの世に来たのは、裁くためである。こうして、見えない者は見えるようになり、見える者は見えないうようになる。」40イエスと一緒に居合わせたファリサイ派の人々は、これらのことを聞いて、「我々も見えないということか」と言った。41イエスは言われた。「見えなかったのであれば、罪はなかったであろう。しかし、今、『見える』とあなたたちは言っている。だから、あなたたちの罪は残る。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

列王記下 6章8～17節

⁸アラムの王がイスラエルと戦っていたとき、王は家臣たちと相談して、「これこれの場所に陣を敷こう」と言った。⁹だが、神の人はイスラエルの王に人を遣わして言った。「あの場所は通らないように注意しなさい。そこにはアラムが攻め下って来ますから。」¹⁰イスラエルの王は、神の人が言った場所に人を遣わし、警告に従って、そこを警戒するようになった。それは一度や二度のことではなかった。¹¹このことによって、アラムの王の心は荒れ狂い、家臣を呼んで言った。「我々の中の誰がイスラエルの王と通じているのか。私に言えないのか。」¹²家臣の一人が答えた。「いいえ、王様。イスラエルにいる預言者エリシャが、寝室でお話しになることさえイスラエルの王に知らせているのです。」¹³するとアラムの王は、「彼がどこにいるのか、捜して来い。人をやって捕まえてやる」と言った。やがて彼のもとに、「彼はドタンにいる」との知らせが届いたので、¹⁴王は、馬と戦車、および大軍をそこに差し向けた。彼らは夜のうちに到着し、その町を包囲した。

¹⁵神の人の召し使いが、朝早く起きて外に出てみると、軍隊が馬と戦車で町を包囲していた。従者が、「ああ、ご主人様、どうしたらよいでしょう」と言うと、¹⁶エリシャは、「恐れることはない。私たちと共にいる者のほうが、彼らと共にいる者より多いのだ」と答えた。¹⁷エリシャが祈って、「主よ、どうかこの男の目を開き、見えるようにしてください」と言うと、主はこの従者の目を開かれた。そこで彼が見てみると、山はエリシャを取り囲む火の馬と戦車で満ちていた。

エフェソの信徒への手紙 5章6～14節

⁶空しい言葉にだまされてはなりません。これらの行いのゆえに、神の怒りは不従順の子らに下るのです。⁷ですから、彼らの仲間になってはなりません。⁸あなたがたは、以前は闇でしたが、今は主にあって光となっています。光の子として歩みなさい。⁹——光の結ぶ実は、あらゆる善と義と真理との内にあるからです。——¹⁰主に喜ばれるものが何かを吟味しなさい。¹¹裏りのない闇の業に加わらず、むしろそれを明るみに出しなさい。¹²彼らがひそかに行っていることは、口にするとのも恥づかしいことなのです。¹³しかし、すべてのものは光によって明るみに出されて、明らかにされます。¹⁴明らかにされるものはみな、光だからです。それゆえ、こう言われています。

「眠っている者よ、起きよ。」

死者の中から立ち上がれ。

そうすれば、キリストがあなたを照らされる。」

ヨハネによる福音書 9章1～41節

¹さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。²弟子たちがイエスに尋ねた。「先生、この人が生まれつき目が見えないのは、誰が罪を犯したからですか。本人ですか。それとも両親ですか。」³イエスはお答えになった。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。⁴私たちは、私をお遣わしになった方の業を、昼の間に行わねばならない。誰も働くことのできない夜が来る。⁵私は、世にいる間、世の光である。」⁶こう言ってから、イエスは地面に唾をし、唾で土をこねてその人の目に塗りました。⁷そして、「シロアム——『遣わされた者』という意味——の池に行つて洗いなさい」と言われた。そこで、彼は行って洗い、見えるようになって帰って来た。⁸近所の人々が、彼が物乞いをしていたのを見ていた人々が、「これは、座って物乞いをしていた人ではないか」と言った。⁹「その人だ」と言う者もいれば、「いや違う。似ているだけだ」と言う者もいた。本人は、「私がそうです」と言った。¹⁰そこで人々が、「では、お前の目はどのようにして開いたのか」と言うと、¹¹彼は答えた。「イエスという方が、土をこねて私の目に塗り、『シロアムに行つて洗いなさい』と言われました。そこで、行って洗ったら、見えるようになったの

です。」¹²人々が「その人はどこにいるのか」と言うと、彼は「知りません」と言った。

¹³人々は、前に目の見えなかった人をファリサイ派の人々のところへ連れて行った。¹⁴イエスが土をこねてその目を開けられたのは、安息日であった。¹⁵そこで、ファリサイ派の人々も、どうして見えるようになったのかと尋ねた。彼は言った。「あの方が私の目にこねた土を塗りました。そして、私が洗うと、見えるようになったのです。」¹⁶ファリサイ派の人々の中には、「その人は安息日を守らないから、神のもとから来た者ではない」と言う者もいれば、「どうして罪のある人間が、こんなしるしを行つて見ることができたのか」と言う者もいた。こうして、彼らの間で意見が分かれた。¹⁷そこで、人々は目の見えなかった人に再び言った。「目を開けてくれたということがあるが、お前はあの人をどう思うのか。」¹⁸「預言者です」と彼は言った。

¹⁹それでも、ユダヤ人たちはこの人について、目が見えなかったのに目が見えるようになったということ信じなかった。ついに、目が見えるようになった人の両親を呼び出して、²⁰尋ねた。「この者はあなたがたの息子で、生まれつき目が見えなかったと言うのか。それが、どうして今は目が見えるのか。」²¹両親は答えて言った。「これが私どもの息子で、生まれつき目が見えなかったことは知っています。²²しかし、どうして今、見えるようになったかは、分かりません。誰が目を開けてくれたのかも、私どもは分かりません。本人にお聞きください。もう大人ですから、自分のことは自分で話してください。」²³両親がこう言ったのは、ユダヤ人たちは恐れていたからである。ユダヤ人たちはすでに、イエスをメシアであると告白する者がいれば、会堂から追放すると決めていたのである。²⁴両親が、「もう大人ですから、本人にお聞きください」と言ったのは、そのためである。

²⁵そこで、ユダヤ人たちは、目の見えなかった人をもう一度呼び出して言った。「神の前で正直に答えなさい。私たちは、あの者が罪人であることを知っているのだ。」²⁶彼は答えた。「あの方が罪人かどうか、私には分かりません。ただ一つ知っているのは、目の見えなかった私が、今は見えるということなのです。」²⁷すると、彼らは言った。「あの者はお前にどんなことをしたのか。お前の目をどうやって開けたのか。」²⁸彼は答えた。「もうお話ししたのに、聞いてくださいませんでした。なぜまた、聞くことなされるのですか。あなたがたもあの方の弟子になりたいのですか。」²⁹そこで、彼らは罵って言った。「お前はあの方の弟子だが、我々はモーセの弟子だ。」³⁰我々は、神がモーセに語られたことは知っているが、あの者がどこから来たのかは知らない。」³¹彼は答えて言った。「あの方がどこから来られたか、ご存じないとは、実に不思議です。あの方は、私の目を開けてくださったのに。」³²神は罪人の言うことはお聞きにならないと、私たちは承知しています。しかし、神を敬い、その御心を行う人の言うことは、お聞きになります。³³生まれつき目が見えなかった者の目を開けた人がいるということなど、これまで一度も聞いたことがありません。³⁴あの方が神のもとから来られたのでなければ、何もおできにならないはずですよ。」³⁵彼らは、「お前は全く罪の中に生まれたのに、我々に教えるようというのか」と言い返して、彼を外に追い出した。

³⁶イエスは彼が外に追い出されたとお聞きになった。彼に出会うと、「あなたは人の子を信じるか」と言われた。³⁷彼は答えて言った。「主よ、それはどなたですか。その方を信じたいのですが。」³⁸イエスは言われた。「あなたは、もうその人を見ている。あなたと話しているのが、その人だ。」³⁹彼が、「主よ、信じます」と言って、ひれ伏すと、⁴⁰イエスは言われた。「私がこの世に来たのは、裁くためである。こうして、見えない者は見えるようになり、見える者は見えなくなるようになる。」

⁴¹イエスと一緒に居合わせたファリサイ派の人々は、これを聞いて、「我々も見えないということか」と言った。⁴²イエスは言われた。「見える者であったなら、罪はないであろう。しかし、現に今、『見える』とあなたがたは言っている。だから、あなたがたの罪は残る。」

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・2月25日「受難節第2主日」の日課主題は「メシアへの信仰」。

・旧約聖書日課は、「列王記下」から、「エリシャ伝承物語」の中に置かれた「対アラム戦記」の一部。使徒書日課は、「エフェソの信徒への手紙」から、「光の子として歩む」ことを勧める箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、生まれつき盲目であった人を主イエスが癒された逸話とそれに続く論争を描く箇所。

旧約日課(列王下6章より)

・「列王記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「前の預言者」の第四に置かれた歴史物語文書。「前の預言者」は、「ヨシュア記」から「列王記」まで、ヨシュアの時代にイスラエルがカナン地方に定住したことから始まり、士師の時代、王国時代を経て、南北両王国が滅亡しバビロン捕囚に至るまでのカナン定住時代を網羅する「イスラエル正史物語」として構成されている。バビロン捕囚からの解放以後に「正典」が編纂されるに際して、南王国(ユダ)の支配層末裔(元王族貴族、元祭司など)によって、ユダ王国の視点から「ユダ(南王国)」と「イスラエル(北王国)」を共通のルーツに立つ民族社会集団と位置づける「大イスラエル主義」の歴史観が採用されていると考えられる。「列王記」は、ソロモンがダビデの王位を継承する王宮物語から始まり、ソロモン王没後の南北王国分裂時代、アッシリアによる北王国の滅亡、バビロニアによる南王国の滅亡までを扱う。これらは、両国の歴代王を順に扱う点で、古代王宮文書としてよく知られる「歴代王誌」の様式が取られているが、重要な時代の転換点が描かれる中で決定的な役割を果たした祭司・預言者の物語が紙幅を割いて置かれていることに特徴がある。その代表的な祭司・預言者が、北王国の物語では「エリヤ」および「エリシャ」であり、南王国の物語では「イザヤ」である。

・日課箇所は、預言者「エリシャ」の物語として展開する中に置かれているが、「王誌」としては、北王国オムリ王朝ヨラム王の時代の戦記となっている。エリシャは、預言者エリヤの後継者という立ち位置で、オムリ王朝と政治的に対立する諸地方聖所を束ねる指導的立場となり、最終的にはオムリ王家の軍司令官イエフを担いでクーデターを起こさせて王朝打倒の上、新しくイエフ王朝を樹立させ、この王朝時代の世俗王権と地方聖所権力との勢力均衡を確立させた人物。エリシャの物語は、北王国領域だけでなく、周辺諸国の王権に対しても政治的な関与を深めており(3章、5章、日課箇所、8:7以下など参照)、地方聖所が単なる宗教集団ではなく、宗教権威に依拠する地方権力として、世俗王権とは独立した政治活動や権力闘争を繰り広げていたことを明確に示す事例となっている。

・日課箇所の背景に描かれているのは、北王国イスラエルとアラム・ダマスコ王国が軍事的に対峙した地域紛争の情勢である。当時、イスラエル王国とアラム王国は地域覇権を争う中堅国家同士であったが、この二国間の対立に漬け込むようにして権謀術数を巡らしていたのが、諸地方聖所(独立系地方権力)のネットワークを束ねていた預言者エリシャであった。エリシャは、アラム王ベン・ハダドの軍司令官ナアマンと通じ(5章)、アラムの対イスラエル軍事進攻を秘密裏に妨害するのみならず、アラム王国の宮廷にも通じてベン・ハダド王の側近ハザエルに王暗殺と王位篡奪を唆してアラム王国と共謀する環境を構築している(8章)。エリシャは、自前の軍事力こそ備えていなかったが、軍事力を有する世俗権力と通じ、利用することを通して、北王国イスラエルの王権に対して影響力を行使し続けたのである。

・このような権力闘争の中で活動したエリシャの物語を、「列王記」は、「主の御業」の働いた出来事として描いている。それは、祭司・預言者らの活動実態が世俗的な側面を強く持つことを知りながら、なおその役割における宗教的意義を正当化するためであったかもしれない。しかし、結果的には、これが「正典」として読まれることによって、祭司・預言者のような宗教者の世俗的政治活動への関与が忌避されるべきものとして解釈される道を拓くことになったとも言えるだろう。

使徒書日課(エフェソ5章)

・「エフェソの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第5に置かれた書簡文書。パウロは、シリア・アンティオキアの教会共同体から派遣されたバルナバ宣教団の一員から離脱し、独自の宣教団を組織して臨んだマケドニア宣教、ローマ教会共同体メンバーの協力を得て参与したコリント宣教を経て、エルサレムおよびシリア・アンティオキアの承認を得た後に、二年程度、エフェソを拠点として活動したと考えられる(使徒16~19章)。パウロが拠点とする以前から、エフェソには使徒らの宣教によって一定規模の教会共同体が形成されていた。そこに加わる形で、パウロはエフェソを拠点として活動したが、何らかの対立が生じてそこを離れなければならなくなり、以後、エフェソを避けて活動した(使徒20章以下)。本書簡は、そのエフェソを離れた時期に執筆されたものと考えられる。なお、聖書学者の中には、本書簡をパウロの手によらぬ、「第二パウロ書簡(パウロの弟子たちの手による書簡)」とみなす者もあるが、必ずしも決定的な論拠があるわけではない。

・本書簡は、宇宙論的な「キリストの体としての教会」観を展開して、キリストに結ばれた者の一致と平和を強調する内容となっている。これは、多様性を包摂する普遍的共同体としての教会観で、パウロが後期に展開した調停的な神学を反映している。また、後の正統神学における「公同教会」論の基礎とされてきた。

・日課箇所は、「キリストの体」の一部とされた者として古い生き方を捨て、新しい「神に愛されている子供」(5:1)にふさわしい生き方に励むべきことが勧められた後、まとめとして記された箇所である。その中で、「暗闇」に対する「光」、および「光の子」という特徴的な表現が用いられている。「光の子」は、新約中で 4 例見られるが(日課箇所の他、ルカ 16:8、ヨハネ 12:36、I テサ 5:5)、日課箇所で「子(テクノン)」という語が用いられているのに対して、他の 3 箇所は「息子(ヒュイオス)」を用いた表現である。「神の子」という表現の場合、主イエスについて言われる場合は「息子(ヒュイオス)」が用いられ、信者について用いられる場合は「子(テクノン)」が用いられる傾向があるが、「光の子」については、すべて信者について用いられていると考えられるにもかかわらず、両語が混用されている。おそらく、主イエスについて「光の子」という呼称を用いる習慣がなかったために、区別なく使われているのであろう。それは、主イエス(キリスト)が信者を「光の子」とするために照る「光」であるという理解に基づくものと考えられる(14 節)。

・14 節の引用は、イザヤ 60:1 などの関連が推認されるが、厳密な引用元は知られていない。

福音書日課(ヨハネ 9 章より)

・日課箇所は、「生まれつきの盲人の癒し」の説話物語とそこから派生した論争物語によって構成されている。大きな文脈としては、7～10 章の「仮庵祭」のエルサレムを場面設定とした枠組みの中に置かれており、10:1 以下で展開する「羊飼いと羊のたとえ」の前提となっている。癒しの説話物語と論争物語を厳密に見分けることは困難であるが、「新共同訳」など一般的には、1～12 節を癒しの説話物語、13 節以下を論争物語として区分されている。1～7 節を癒しの説話物語、8 節以下を論争物語として区別する者もある。

・全体の物語は、1～9 節では、癒された盲人その人に焦点が据えられているが、10 節以下では、その人を癒した方、すなわち主イエスに焦点が移行している。すると、この区分の区切り 9 節の「わたしがそうなので(エゴ・エイミ)」が重要な意味を示唆していると考えられる。「エゴ・エイミ」は、補語を伴って「わたしは…である」という言い回しの一般的な表現であるが、「ヨハネ福音書」では、特に「わたしはある」(8:24,28,58,13:19)と訳される特徴的な用法が知られている。日課箇所、生まれつきの盲人で物乞いをしていた人は、主イエスに唾でこねた土を目に塗っていただき、シロアムの池で目を洗ったところ、見えるようになり、もはや物乞いをする必要がなくなった。この変化を見た人々が、本当に同じ人物なのかと問うたのに対して、この人は「エゴ・エイミ」(9 節)と、前段 8 章で繰り返し主イエスが自己表示として用いられた言い方で答えている。この癒しの出来事が、彼を主イエスと同質化させるものであったことを、示唆しているのだろう。

来週の誕生日 (2月25日～3月2日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-294 番「ひとよ、汝が罪の」(= II 99 番)は、16 世紀宗教改革期のドイツの音楽家ハイデンガルトターの説教に影響されて作った詞で、原詞は 22 節で構成された受難物語を歌う詞だが、近年の讃美歌集には 1 節と最終節が採用されてきた。曲は、同時期の音楽家グライターの作で、1525 年発行の詩編歌集に詩編 36 編のための曲として作曲。グライターは、一時期プロテスタント教会に属し牧師職にも就いたが、後年カトリックに回帰した。
- ・21-446 番「主が手を取って起こせば」は、教団牧師・今駒泰成が「ともうたおう」(1976 年発行) 編纂に先立つ歌詞公募に応募した歌詞。今駒が盲人キリスト教伝道協議会の働きに従事する中で着想した。今駒の歌詞は、他に 58 番「み言葉をください」など。曲は、この歌詞のために、カトリック信徒の作曲家・新垣壬敏が作曲。新垣の曲は、他に 5 番「わたしたちは神の民」や 81 番「主の食卓を囲み」など。
- ・21-430 番「とびらの外に」(= I 240「とざせる門を」)は、19 世紀英国の著名な讃美歌作家ウィリアム・W. ハウが黙示録 3:20 に基づいて作詞。『讃美歌 21』では全面的に改訳されている。

21-294「ひとよ、汝が罪の」

O Mensch, bewein dein Sünde gross

1. O Mensch, bewein dein Sünde groß, / darum Christus seins Vaters Schoß / äußert' und kam auf Erden; / von einer Jungfrau rein und zart / für uns er hier geboren ward, / er wöllt der Mittler werden. / Den Toten er das Leben gab / und tat dabei all Krankheit ab, / bis sich die Zeit herdrange, / dass er für uns geopfert würd, / trüg unsrer Sünden schwere Bürd / wohl an dem Kreuze lange.
2. So lasst uns nun ihm dankbar sein, / dass er für uns litt solche Pein, / nach seinem Willen leben. / Auch lasst uns sein der Sünde feind, / weil uns Gotts Wort so helle scheint, / Tag, Nacht danach tun streben, / die Lieb erzeigen jedermann, / die Christus hat an uns getan / mit seinem Leiden, Sterben. / O Menschenkind, betracht das recht, / wie Gottes Zorn die Sünde schlägt, / tu dich davor bewahren!

21-430「とびらの外に」

O Jesus, Thou art standing

1. O Jesus, thou art standing / outside the fast-closed door, / in lowly patience waiting / to pass the threshold o'er: / shame on us, Christian brothers, / his name and sign who bear, / O shame, thrice shame upon us, / to keep him standing there!
2. O Jesus, thou art knocking; / and lo, that hand is scarred, / and thorns thy brow encircle, / and tears thy face have marred: / O love that passeth knowledge, / so patiently to wait! / O sin that hath no equal, / so fast to bar the gate!
3. O Jesus, thou art pleading / in accents meek and low, / "I died for you, my children, / and will ye treat me so?" / O Lord, with shame and sorrow / we open now the door; / dear Savior, enter, enter, / and leave us nevermore.